

相談室だより (みさき・くろさき 2010年1月)

担当：みさき病院 MSW 緒方

2010年も年が開けて、早いものでもう1ヶ月がたとうとしています。今年、初めての「相談室だより」です。今回は、『在宅介護について』です。私が在宅退院をお手伝いさせて頂いた方へインタビューをお届けします。



在宅介護の「よろこび」



重度片麻痺の夫(60歳)を介護する奥様のお話し

概要

2005年に、事故にて急性硬膜外血腫を受傷され、重度の右片麻痺と言語障害が残る。みさき病院を含めて、約3年6ヶ月の入院後、自宅介護・退院を決意。

近畿での入院生活

ご夫婦は、近畿地方にお住まいで、ご主人さまは約2年間近畿地方の病院に入退院を繰り返されてきました。奥さまは、みさき病院の前病院で、外泊を勧められます。しかし、『外泊なんて出来っこない!』と反射的に思ってしまいます。スタッフから、「何で出来ないのかな?一つ一つその原因を言ってみてください」と言われ、「まず、ベッドがないし、トイレも不安だし…」等、初めて奥さまなりに在宅生活を頭の中でイメージされます。そして、いきなり外泊とはいきませんでした。外出に挑戦され、美術館や博物館をご夫婦一緒に見学されたのです。外出先に美術館を選ばれた理由は、「車椅子でも行けるから」でした。

みさき病院へ転院

ご夫婦の実家のある大牟田に戻り、将来的に在宅介護をしようと漠然的に思いながら、みさき病院に転院をされてきたのが、2007年の秋でした。私が奥さまと最初に面接した時も「在宅介護にチャレンジしたい」と、はっきりとおっしゃっていました。しかし、ご主人の障害は重く、歩行や移動、排泄や入浴など多くの場面で介助が必要な状況で、「どうしたらよいか分からない」と大きな不安もお持ちでした。

入院後、奥様は、医師・病棟スタッフ、リハビリスタッフから、病状・リハビリ・具体的な介護方法のことを学ばれ、MSWからは、障害者自立支援サービス等の制度のことを学ばれました。勿論、ご主人様もリハビリを懸命に頑張られました。ついに受傷から3年6ヵ月後、ご自宅への退院とされます。

自宅での介護と生活

在宅での介護が始まりました。正確には、「家でのご夫婦二人の生活が再開しました」という表現になります。奥さんは、こうおっしゃいます。「病院では見ることの出来なかった主人の姿が家では見ることが出来た。」

夫らしさ、その人らしさ

病院では見ることの出来なかった主人の姿とは、具体的にはどのようなものでしょうか。それは、「喜んだり、怒ったりと感情が豊かになった主人の姿です」と、奥様は答えられました。そして、こう続けられました。「病院では、変に素直で、看護師さんの言う事や私の言うことも、『うん、うん』と聞いていました。しかし、家に帰ると、嫌な事は顔をしかめて、イヤと表現するんです、はっきりと。これはこれで大変なんですけど、主人はきちんと自分の感情が表現できるんだと嬉しかったです。『こんなこともあったんですよ。私が外出し、主人が一人で留守番していると、冷蔵庫にとっておいた私の好物がないんです。問い詰めると、ヘルパーさんに頼んで、取ってもらって食べたって言うんです。昔(けがをする前)なら、嫌な気持ちしかならなかつたんですが、今は嫌な気持ちとこんなことも出来るんだという嬉しい気持ちにもなります。主人らしさが戻ったとでも言うんでしょうかね…」

介護の工夫

在宅介護に臨むに当たって、一番注意した点が「介護に当たる奥様も、介護されるご主人様も 孤独にならないこと」でした。これは、奥様も病院スタッフも同じでした。奥様は、今でもご主人を一人家に残して、買い物にも行かれます。時には、ご主人に短期入所をお願いして、友達と旅行にも行かれます。(その間にご主人様はちょっとしたイタズラをされたりします。)ご主人がその人らしくあるためにも、奥さんが自分らしくあるために、自分のための時間を上手に使っておられます。

私たち病院職員は兎角、「退院援助」と言えば、家族を「主たる介護者」と「介護を受ける人」に分けてしまいます。これも重要ですが、ここから抜け出せないでいると、このご夫婦のような「ご主人の強さ・奥さまの強さ」があるのに、それに気付かず仕舞いです。在宅介護の大変さだけを見て、在宅生活のある何気ないよろこびを一緒に感じることは出来なくなります。

その人らしさ、その家族らしさの追及が、私たちMSWにとっても大切なんだと気付かせて頂きました。